

# 日本フェミニスト経済学会 2024年度大会 共通論題テーマ「フェミニスト経済学とエコロジー ——人間と環境のウェルビーイングを模索する」趣旨説明

共同座長 岩島 史（京都大学）

大橋史恵（お茶の水女子大学）

2024 年度大会の共通論題企画については例年よりも早い段階から、「フェミニスト経済学とエコロジー」にしたいという構想がはじまっていた。そのきっかけは、日本フェミニスト経済学会が 2023 年度から取り組んできた『フェミニスト経済学ハンドブック』（The Routledge Handbook of Feminist Economics）の翻訳版刊行に向けたプロジェクトにあった。会員や会員外の研究者らとの連携において行われてきた翻訳とそのための勉強会のなかで、国際的には生態経済学（Feminist Ecological Economics）、エコフェミニスト経済学（Ecofeminist Economics）、フェミニスト政治生態学（Feminist Political Ecology）といったフェミニズムの新たな思潮がエコロジーを議論していることに注目が集まったのである。

第二波フェミニズムの潮流のなかでは、「自然」と「女性」とが資本主義の成立要件の外部に位置づけられていることについての批判的な議論が積み重ねられていた。1980 年代のエコフェミニズム論争などにおいて、女性を本質主義的に自然・環境・母性に結びつける危険性が批判されて以来、日本でフェミニスト視点からエコロジーを論じようとする視座は、確固たる潮流を形成するに至ってこなかったように思われる。

一方でこの数十年のあいだに、気候変動が災害というかたちをとって人間の経済社会関係に大きな「危機」をもたらすようになった。近年では自然環境をシステムの外部に位置づけるのではなく、人間の経済活動が地球環境に不可逆的な変化を与えていることをとらえる「人新世」の議論が大きな話題を呼んでいる。エコロジーという問題系は学術領域を横断して、知のありかたに再考を迫っている。このような局面において私たちは、フェミニストの批判的関心をどのように掲げることができるのだろうか。2024 年度大会の共通論題ではこのような新しい趨勢を見据えつつ、「人間以上の」（more-than-human）相互依存的な関係に根ざしたエコシステムをフェミニスト視点から再想像するような議論をめざした。

第 1 報告者の佐藤千寿氏は、フェミニスト政治生態学を主軸に、ポストコロニアリズムやポストヒューマニズムに根ざしたフェミニズム理論をふまえながら、従来の人文社会

科学のパースペクティブを越えて議論していくことの可能性を提起した。資本中心主義から多様な経済へ、人間中心主義からマルチスピーシーズ経済へと想像力を広げていくことが、フェミニズムとエコロジーという問題系に新たな思路を切り開くという、本共通論題全体に通底する関心が示されたといえる。

第2報告者の湯澤規子氏は、環境と人間の関係が大きな転機を迎える19世紀に「ヒューマン・エコロジー」概念を提起した女性化学者エレン・スワロウ・リチャーズが、人間社会だけでなく水や空気や食物といった「人間以上」の関係をケアすることの重要性を問おうとしていたこと、そしてその思想が20世紀初頭にかけて女性労働運動にも引き継がれていたことを歴史的視座から振り返った。

第3報告者の嶽本新奈氏は、熊本県天草郡苓北町の石炭火力発電所建設反対運動の拠点としての天草環境会議を事例に、40年余続けられた運動のなかで、海洋やみかん山の生態系をケアしともに生きる関係を再生産していく地元の人びとの営みや、会議参加者のために食事を作り歓待することで議論のアリーナを守っていく女性たちの労働が、いかに不可視化されてきたかという矛盾に目を向けた。

第4報告者の福永真弓氏は、「食べる」という生存の基盤となる行為実践を基軸に、私たちが生きているのは「生命がインフラ化する世界」であることを描写する。食の多様化が商品を生み出し経済を方向付けていくこの世界は、生物と非生物、人間と非人間、生命と非生命といった境界そのものが二元論的パースペクティブではとらえられない「クイア・エコロジー」を生み出しているが、その複雑な関係性においてなお人間が思うようにならないかたちで「自然」は(再)生成され続ける。

討議の場では、アグロエコロジー論を通じて食と農、エコロジーについて実践的な議論を行ってきた小林舞氏、エコフェミニズムとマルクス主義フェミニズムの潮流の交差をとらえてきた伊田久美子氏からのコメントを受けつつ、フロアからも活発な議論が提起された。ヨーロッパのフェミニスト政治生態学の理論と実践を牽引してきたウェンディ・ハーコート氏もフロアから議論に参加した。エコロジーの問題が扱われたのは、日本フェミニスト経済学会大会共通論題でははじめてのことであったが、再生産労働やケア、生存といった多くの会員の専門性に深くつながり、新たな論点を生み出すような意義深いシンポジウムであったといえるのではないか。このときの議論は、『週刊金曜日』2024年8月23日号にも紹介された。あわせて読んでいただくと、盛況な会場の様子に触れることができるだろう。

本シンポジウムの報告に見られるように、「人」と「自然」の二元的パースペクティブの問い直しは、様々な時代、分野で断続的に提起されてきた。今後私達が、フェミニスト経済学の課題としていかに引き受けていけるかが、問われているといえよう。